

## 作文の評価に影響する心理的要因

森 敏 昭・石 田 潤

(1988年9月8日受理)

Some psychological factors influencing evaluation of composition

Toshiaki Mori and Megumu Ishida

The present study investigated factors influencing reader's evaluation of composition. The data matrix, collapsed across subjects within cells, was a  $2 \times 2 \times 2 \times 2$  with the factors being writer's attitude toward an editorial (agreeing or disagreeing), writer's preparation for writing a composition (prepared or unprepared), type of composition (supporting or opposing), and reader's attitude toward the editorial (agreeing or disagreeing). Twenty university students rated 5 compositions for each of 8 conditions on 2 general scales and 4 specified scales. The analysis of rating scores revealed that the compositions were rated higher for the agreeing condition (writer's attitude), the opposing condition, and the prepared condition. In addition, the interaction between type of composition and reader's attitude and the interaction between type of composition and writer's attitude were obtained, providing higher rating when type of composition coincided with reader's attitude as well as writer's attitude. The theoretical implications of these findings were also discussed.

Key words: production of composition, comprehension of composition, evaluation of composition, writer's attitude, reader's attitude.

人間が文を理解するということは、文の字義通りの意味を理解すること以上のものを含んでいる。例えばある会社で、上司が日頃から勤務態度のよくない部下に対し、「君はいつも熱心に働いてくれるね」と言ったとしよう。このような場合、これはいわゆるアイロニー表現だと解し、この文の字義通りの意味とは反対の意味を読み取るのが妥当であろう。また、この上司が、「今日はやけに蒸し暑いなあ」と言ったとしよう。この場合、これは「クーラーをもう少し強くしてくれ」とか「何か冷たいものを持ってきてくれ」と間接的に要求しているのだなど、察しのよい人ならばそのように解釈するに違いない。これらの言語表現に共通しているのは、その表現の真の意味が表現そのものの中には明示されないことである。従って、このようなアイロニーや間接的要求の表現を正しく理解するためには、文自体の統語論的分析や意味論的分析を行うだけでは不十分である。その表現がどのような「文脈」の下で発せられたのかを語用論的に分析することによ

て、初めてその表現の真の意味を理解することが可能となるのである(森・中條, 1988)。

以上の論議の論点をもう少し明確にするために、ここで文脈の定義について若干の検討を加えておく必要があるであろう。なぜなら、文脈という用語は、人間の文章理解の過程を探る際のキーワードの1つであるにもかかわらず、これまでかなり曖昧に用いられているきらいがあるからである。山梨(1987)は文脈を次の3つの用法に分類することを提唱している。第1は「言語的文脈」で、言語的な脈絡や文の前後関係を指している。第2は当該の言語表現や発話の行われる場面や状況を指す場合で、これを「物理的文脈」と呼んでいる。第3は当該の言語表現や発話に関わる話し手や聞き手、さらには第3者をも含めた社会的相互作用の場としての「社会的文脈」、および当該の言語表現に関わる人物の一時的ないしは恒常的な信念の体系によって規定される「心理的文脈」を指している。以上の文脈の分類のうち、第1の意味での文脈は、文章そ

のものに明示されている文脈であり、文章の結束構造を分析することによって形成される。これに対し、第2および第3の意味での文脈は、文章の構造として文章それ自体に明示されている文脈ではなく、当該の文章表現がなされた社会的相互作用の場の影響の下に、その相互作用の場に関わっている人物の内部世界において形成される社会的・心理的枠組や視点を指している。そして人間の文章理解の最大の特徴は、文章表現そのものに明示されているとは限らない表現の背後にある意味を、言語的文脈だけでなく社会的文脈や心理的文脈の分析を通して推論するという意味において「深い理解」が可能であることである。上に例として挙げたアイロニーや間接的要求などの言語表現も、人間の持つこうした「深い理解」の能力を前提にして成り立っているのである。

上述の人間の言語理解の特徴は、会話など話し言葉の理解だけでなく、書き言葉の理解においても同様に当てはまる。そのことは、詩歌を理解する場合のことを考えれば容易に納得できるであろう。なぜなら、詩歌では作者の心情や心象世界が論理的に明確な形で記述されることはあまりなく、隠喩などさまざまなレトリックを駆使して象徴的に、しかも凝縮して表現されることが多いからである。このため詩歌を理解(鑑賞)する場合には、作品を手掛かりにして、常に「作者はいったい何を表現しようとしているのか」を推論するというプロセスが進行し、そのことを通じて作者の心情や感性の世界を想像したり追体験するといった、「共感的理解」がなされるのである(小谷津, 1984; 森, 1987; 森・石田, 1986)。ところで、このような「共感的理解」の問題は、評論文や論説文など、論理的な文章を理解する場合においても無視することのできない問題である。作者の思想や意見が論理的に記述された文章である論説文や評論文を理解するということは、単にそこで展開されている論旨を受動的に受け入

れることを意味している訳ではない。もちろん作者が展開している論旨を正確に読み取ることが大前提ではあるが、それだけでなく、読者自身の思想、信念、意見等に照らしつつ、論旨に矛盾はないか、導き出された結論は妥当なものであるか、作者の思想や意見が説得力を持って伝わってくるかといった点などについて、絶えず批判的な評価を下しながら読み進めることが必要となる。そして、その際には、俗に「行間を読む」と言われるような、文章そのものには明示されていない作者の微妙な心情や本心(本音)の読み取りもなされるであろうし、作者の思想や心情の「共感的理解」もなされるはずである。

さて、このような「共感的理解」は主観的な理解であるため、その仕組みを実験によって客観的に捉えることは必ずしも容易ではないが、1つの可能な方法は、ある意見や主張を述べる目的で書かれた文章をさまざまな観点から被験者に評価させ、その評価に影響する要因を分析することであろう。そこで、本研究では、ある新聞の社説に対して賛成する立場または反対する立場から書かれた作文を被験者に評価させ、その評価がどのようになされるかを分析することによって、論説文の理解のメカニズムを解明することを試みた。

## 方 法

**被験者** 作文の収集のための被験者は117名の大学生であった。これとは別の20名の大学生が作文の評定を行った。このうちの10名は、作文の題材となった社説の論旨に対して賛成の態度を持っており、残りの10名は反対の態度を持っていた。

**材料** 評定の対象となる作文は次のような手順で収集した。作文の題材としては新聞の社説「女性への期待」(朝日新聞, 1975)を用いた(Table 1参照)。

Table 1  
理解の材料 (女性への期待)

今年は「国際婦人年」。1972年の国連総会での宣言にもとづき、男女平等、国際友好などの目標をかかげてさまざまな催しが内外で開かれる。大いに結構なことと思う。

あらゆる意味でいま、世界は一つの曲がり角に立たされている。物質文明の繁栄のかけの精神文化の荒廃。経済万能の効率主義の下で、人間がまるで機械かロボットのように扱われる。多くの人々が生きがいを、明日への展望を見失っている。

なにがこのような状況を生み出したかについては、各人各様の意見があろう。たしかなことは、いままでの社会は男性がリードし、主として男性の発想によって動かされてきた。その社会がここへきて行きづまったという現実である。

この社会を変える力を持っているのは、女性である。女性には男性にない天与の美質がある。その美質こそが、暗い終末をさえ予想させる世界に、再び光をとり戻す原動力となるのではあるまいか。

女性はなによりも美の礼賛者である。美しさを至上最高の価値として認める。美しい森や海をつぶしてコンビナートを作

るような考え方は、そもそも女性の本性に合わぬはずだ。金にとりつかれた男性の迷妄をさまし、美しい自然をとりかえず役割をにるのは女性である。

女性はやさしい性であり、本質的に平和愛好者である。それは戦火のかげで泣くのがつねに女性だというだけの理由ではない。瞬間的な爆発力に欠ける女性は、本来暴力を拒否する特質を持っている。なにかといえはすぐに武力に訴えたがる男性の愚かさをたしなめ、世界に平和をもたらすことのできるのも、また女性である。

鋭い直感力とこまやかな感受性もまた女性の特質だ。それが優雅な文化を生み、暖かな家庭を作り、すこやかな子どもたちを育てる。とげとげしい世の中に、うるおいを与えるのもまた女性だ。

いや、そんなことはないと言う人も少なくなろう。がめつくて闘争的でやたらセンチメンタルで、という反論もある。また、女性の悪い面、みにくい面を強調する皮肉な人たちもいる。

だがそのような男性もまた、実は美しい心をもった女性へのあこがれを胸に秘めているのではあるまいか。そうあってほしいと思う女性像と、現実のそれとがなかなか一致しない不満が、女性批判となってはき出されるのに違いない。

美しいものの好きなのは女性の女性、なぜ低俗なドラマに夢中になり、のぞき趣味の記事ばかりを愛読し、やたらにけばけばしい化粧をするのか。金切り声をあげてヘルメットをかぶりたいがるのか。

おそらく女性は、まだ本当には自分自身の持つ美質に気づいていないのではなからうか。と同時に男性の愚劣さ、みにくさにも。だからこそ男女同権の主張が男女同質論にすりかえられてしまいがちなのではあるまいか。

もう一度女性が自己のうちなる“永遠に女性なるもの”の本質を再発見することが肝要であろう。男性の不当な抑圧が少なくなりつつあるいまこそ、女性的美質が十分に発揮されねばならない。それなのに今度は女性が、その美質をみずから放棄してしまうようなことにでもなれば、なんとももったいない話である。

これからの女性に、男性主導型の世の中の世直しを望みたい。そのためには、愚昧な男性の真似など、間違ってもしてほしくないのである。

117名の大学生にこの社説を読ませ、「社説を読む際の構え」の要因と「作文を書く際の立場」の要因を組み合わせた4つの条件のいずれかの下で作文を書かせた。「社説を読む際の構え」の要因とは、後でこの社説について作文を書くという構えを持って社説を読むかどうかを指している。即ち、「構え有り」条件では「次の文章は、国際婦人年(1975)に書かれたある新聞の社説です。後でこの文章の内容について、賛成する(または反対する)内容の作文を書いてもらいますので、そのつもりで内容をよく理解しながら読んで下さい。」という指示の下で、「構え無し」条件では「次の文章は……社説です。後でこの文章の内容について簡単な質問をしますので、そのつもりで内容をよく理解しながら読んで下さい。」という指示の下で7分間社説を精読した。「作文を書く際の立場」の要因とは、社説に対して「賛成する立場」から作文を書くか、それとも「反対する立場」から作文を書くかを指している。作文の制限時間は約20分であり、全員が時間内に作文を書き終えた。なお、作文を書き終えた後に、真偽判断問題(Table 2)によって社説の理解度のテストを行った。最後に、社説に対する態度を5段階(非常に反対:1~5:非常に賛成)で自己評定した。

以上の手順で収集した117篇の作文の中から、4つの条件ごとに社説に対する態度が反対(評定値が2以下)であった被験者の作文と、賛成(評定値が4以上)であった被験者の作文をそれぞれ5篇ずつ抽出し、合計40篇の作文を評定の材料として用いた(Table 3お

よび Table 4)。

手続き 20名の評定者は、それぞれ40の作文の総てについて、次の6尺度によって評定を行った。6尺度のうち2尺度は総合的評価の尺度であり、客観的評価の尺度(客観的にみてどのくらいうまい作文と言えるか)と主観的評価の尺度(主観的にみてどのくらいその作文が好きか)とがあった。残りの4尺度は観点別評価の尺度であった。第1は「説得力」の尺度である。評定者にはあらかじめ作文がどのような論旨で書かれたものであるかが知らされており、その論旨がどの程度説得力を持っているかについての評定を求めた。第2は「表現力」の尺度である。これは個々の文の表現や言いまわしのうまさ、巧みさに関する尺度である。第3は「構成力」の尺度である。これは作文全体の構成のうまさに関する尺度である。第4は「独創性」の尺度である。これは文章全体の個性やユニークさに関する尺度である。評定者には「総合的評価を観点別評価の前に行うこと」、「40の作文の評定順序は尺度ごとにランダムにすること」を強調する指示を与え、評定は個別的に実施した。

## 結 果

各評定尺度の条件差 各条件の5篇の作文の評定の平均値をそれぞれの尺度における各条件の代表値として、以下の分析を行った。Table 5に各条件における平均評定値を尺度ごとに示した。なお、分散分析の結

Table 2  
真偽判断問題 (女性への期待)

【真文】

1. 女性は自分自身が美の礼賛者であり、平和愛好者であることに気がついていない。
2. 男女が同質であることを主張しては、社会のいきづまりは打開できないだろう。
3. 男性が女性を批判するのは、女性が美しい心を発揮していないことへの不満である。
4. 美しい森や海をつぶしてコンビナートを作るような考え方は、男性特有のものである。
5. 現代社会のいきづまった現状を打開することのできるのは、天与の美質をそなえた女性であるということを、女性自身、もっと認識すべきだ。
6. 最近の女性運動が、ともすれば、男女同権論を男女同質論にすりかえてしまう過ちをおかすのは、女性が自分自身のもつ美質を自覚していないからではなかろうか。

【偽文】

1. 今日、物質文明の繁栄のかげで、精神文化が荒廃しているのは、男性が無意識の底で女性をべっ視し、女性を社会活動からしめ出しているからである。
2. 男性は女性のうちなる「永遠に女性なるもの」の本質を再発見することが肝要であろう。
3. かつて女性は美を愛するやさしい性であったが、今日では、がめつく、闘争的で、やたらセンチメンタルである。
4. 男性がリードしてきた社会が行きづまってしまったという現実の中で、男性は自らの愚劣さに気づき始めた。
5. 今日、多くの人々が生きがいを失い、明日への展望を見失っている原因は、全世界的に精神文化が荒廃し、経済万能主義が広がっているからである。
6. 男性は自分たちの愚昧さを率直に反省し、女性のもっている、美を愛し、平和を愛する心こまやかな感受性などをもっとみならうべきである。
7. これまで社会をリードしてきた男性の力はもはや限界に達している。したがって、女性がこの仕事を受けつがねばならない。
8. おそらく、女性は、男性の愚劣さ、みにくさには気づいているであろう。
9. 現代社会の様々な弊害をなくすには、女性が積極的に社会参加し、男性に負けない力を示すことである。

Table 3  
作文の例 (構え無し－賛成作文)

人類が歩んできた歴史を振り返ってみると、一般に言う文明が高度になっていく程、女性は軽んじられてきた。「原始、女性は太陽であった」と平塚来鳥が言っているように、まだ未文明の時代には女性の本質が畏敬されていたのである。

本来女性は優しく静かなものを好む。それは単なる優雅とかしとやかとかいったものでなく、生きていく上で静かに暖かく流れる命の川に沿って歩いて行きたがる。しかしどこでどう取り違えられたのか、その優しさは単なる弱さと考えられ、男性社会の重圧を耐えしので来たのだ。女性は闘争を好まないせいもあり、そのプレッシャーを押し返そうとしなかった。それは女性の隠された賢明な心で、そんなことをすれば男性社会はますます荒れ狂うと悟ったからであろう。

だが、現代は一步踏みはずせば奈落の底、人類滅亡である。男性はその闘いを男らしさと思い込み悦に入っている。今こそ女性の本当の強さ（それは子供に対する愛情などにしばしば見られるのだが）を発揮し、この世界を静かに変えていかなければならない。

Table 4  
作文の例 (構え有り－賛成作文)

最近、女性の社会運動があらゆる方面で活発になっています。本屋の店頭には、女性の生き方を教授する文庫本があふれています。それにもかかわらず、いぜんとして男女同権論は、一般に支持されていないように思います。それは多くの人が、男女同権ということを、男性と女性は全く同じ人間であるから、差別せず、男性と同じ権利を女性に与えようという男女同質論と混乱して考えているからだだと思います。

比べてみるまでもなく、男女の差は、身体的、精神的な面で歴然としています。男女同権というのは、その違いを認めた上で、もっと女性にも活躍の場を広げて欲しいとして女性の権利の向上を求めています。

今、社会は男性主導型の発展の後、環境、精神、文化に多くの障害をきたしています。このあやまった方向を修正し、正しい方向にもっていくことができるのは、「美」の概念だと思われます。人間が人間らしく生きる一「よく生きる」ためには、真・善・美これらを念頭にいれてゆくべきだと思います。特に、美をいまままでないがしろにしてきたため、いき詰まっているのでは……と思い始めました。

美を最も強く求めるのは、女性です。社会を正しい方向に修正するため、女性の力を社会に進出させるため、男女同権を望みます。

果、どの尺度においても評定者の態度の要因の主効果は有意ではなかったため、込みにして表にした。評定者の態度（賛成、反対）×書き手の態度（賛成、反対）

×書き手の構え（構え有り、構え無し）×作文の種類（賛成作文、反対作文）の4要因の分散分析の結果を尺度ごとに整理すると次のようであった。

Table 5  
各条件における尺度ごとの平均評定値

〔総合・客観的〕構え有り			構え無し			〔表現力〕 構え有り			構え無し			
	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均
賛成作文	6.41	5.88	6.15	6.52	5.43	5.98	5.80	4.82	5.31	5.84	4.35	5.10
反対作文	6.51	6.43	6.47	5.69	5.87	5.78	5.79	5.91	5.85	5.00	5.31	5.16
平均	6.46	6.16	6.31	6.11	5.65	5.88	5.80	5.37	5.59	5.42	4.83	5.13

  

〔総合・主観的〕構え有り			構え無し			〔構成力〕 構え有り			構え無し			
	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均
賛成作文	5.42	4.85	5.14	5.96	4.92	5.44	5.86	4.83	5.35	5.94	4.44	5.19
反対作文	6.00	5.96	5.98	4.92	4.85	4.89	5.73	5.94	5.84	4.89	5.41	5.15
平均	5.71	5.41	5.56	5.44	4.89	5.17	5.80	5.39	5.60	5.42	4.93	5.18

  

〔説得力〕 構え有り			構え無し			〔独創性〕 構え有り			構え無し			
	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均	賛成態度	反対態度	平均
賛成作文	5.62	4.99	5.31	5.78	4.53	5.16	5.28	4.59	4.94	5.64	4.23	4.94
反対作文	5.79	6.18	5.99	5.13	5.34	5.24	5.45	5.85	5.65	5.52	5.61	5.57
平均	5.71	5.59	5.65	5.46	4.94	5.20	5.37	5.22	5.30	5.58	4.92	5.25

Table 6  
理解度、結束度、創作度、及び、6つの評定尺度間の相関行列  
(上三角行列は評定者が賛成態度の場合、下三角行列は評定者が反対態度の場合)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
A	1.00	.153	.186	.001	.042	.096	-.024	-.053	-.096
B	.151	1.00	-.018	.455	.288	.402	.397	.425	.394
C	.192	-.022	1.00	.159	-.055	.232	.148	.175	.375
D	.086	.305	.133	1.00	.736	.885	.875	.859	.725
E	.040	.122	.322	.744	1.00	.802	.876	.755	.471
F	.126	.248	.350	.864	.805	1.00	.925	.893	.670
G	.177	.211	.164	.869	.618	.860	1.00	.941	.700
H	.200	.203	.273	.878	.731	.937	.916	1.00	.666
I	.059	.289	.534	.588	.593	.731	.685	.721	1.00

A : 理解度  
B : 結束度  
C : 創作度  
D : 客観的総合評価  
E : 主観的総合評価  
F : 説得力  
G : 表現力  
H : 構成力  
I : 独創性

客観的総合評価の尺度では、書き手の構えの主効果（構え有り>構え無し）および書き手の態度の主効果（賛成>反対）が有意であった（ $F=17.53, df=1/18, p<.01$ ； $F=13.21, df=1/18, p<.01$ ）。また、書き手の構え×作文の種類の交互作用、および、作文の種

類×書き手の態度の交互作用が有意であった（ $F=5.51, df=1/18, p<.05$ ； $F=11.29, df=1/18, p<.01$ ）。

主観的総合評価の尺度では、書き手の構えの主効果（構え有り>構え無し）および書き手の態度の主効果（賛成>反対）が有意であった（ $F=14.73, df=1/18,$

$p < .01$ ;  $F = 9.55$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ). また、評定者の態度×作文の種類×書き手の態度の交互作用、書き手の構え×作文の種類×書き手の態度の交互作用、および、作文の種類×書き手の態度の交互作用が有意であった ( $F = 6.53$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ;  $F = 27.47$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ;  $F = 6.39$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ).

説得力の尺度では、書き手の構えの主効果 (構え有り>構え無し)、作文の種類の主効果 (反対作文>賛成作文) および書き手の態度の主効果 (賛成>反対) が有意であった ( $F = 15.25$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ;  $F = 7.12$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ;  $F = 5.10$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ). また、書き手の構え×作文の種類×書き手の態度の交互作用、および、作文の種類×書き手の態度の交互作用が有意であった ( $F = 5.28$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ;  $F = 21.45$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ).

表現力の尺度では、書き手の構えの主効果 (構え有り>構え無し)、作文の種類×書き手の態度の交互作用が有意であった ( $F = 19.53$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ;  $F = 9.07$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ;  $F = 11.19$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ). また、作文の種類×書き手の態度の交互作用が有意であった ( $F = 21.03$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ).

構成力の尺度では、書き手の構えの主効果 (構え有り>構え無し)、作文の種類×書き手の態度の交互作用が有意であった ( $F = 33.28$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ;  $F = 5.15$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ;  $F = 9.19$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ). また、書き手の構え×作文の種類×書き手の態度の交互作用、および、作文の種類×書き手の態度の交互作用が有意であった ( $F = 4.51$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ;  $F = 30.33$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ).

独創性の尺度では、作文の種類×書き手の態度の交互作用が有意であった ( $F = 17.54$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .01$ ;  $F = 10.21$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ). また、作文の種類×書き手の態度の交互作用が有意であった ( $F = 44.80$ ,  $df = 1/18$ ,  $p < .05$ ).

以上の分析結果は次のように要約することができるであろう。

①構え有り条件の作文の方が構え無し条件の作文よりも、書き手の態度が賛成の場合の方が反対の場合よりも、反対作文の方が賛成作文よりも、概して評定値が高くなる。

②構え有り条件では反対作文の方が評定値が高くなり、構え無し条件では逆に賛成作文の方が評定値が高くなるというように、書き手の構え×作文の種類×書き手の態度の交互作用がみとめられる。

③書き手の態度が賛成の場合には賛成作文の方が、書き手の態度が反対の場合には反対作文の方が評定値が高くなるというように、書き手の態度×作文の種類×書き手の態度の交互作用がみとめられる。

作文の分析 作文に対する評定がどのような手掛かりに基づいてなされるのかを明らかにするために、作文の構造を次の2つの観点から分析した。第1は文章が全体としてどれだけまとまっているかという観点であり、第2は作文の中に社説には述べられていなかった内容がどれだけ記述してあるかという観点であった。これら「結束度」および「創作度」の指標はそれぞれ次式によって得点化した。

結束度 = [文の総数 - 文間が意味的に不連続になっている箇所数 - 1] / [文の総数 - 1]

創作度 = [社説には述べられていなかった内容が記述してある文の数] / [文の総数]

なお、文間の意味的關係が不連続であるかどうか、および、社説には述べられていない内容が記述してある文であるかどうかの判定は、2人の研究者がそれぞれ独立に行い、相違があった箇所については討議のうえ決定した。

尺度間の相関 Table 6は理解度、結束度、創作度と、6つの評定尺度間の相関係数(ピアソンの偏差積相関係数)を算出し、一覧表にしたものである。この表から読み取ることのできる結果は、次のように要約することができるであろう。

①理解度の尺度は他のどの尺度とも有意な相関がみられなかった。

②結束度の尺度は評定者が賛成態度の場合の客観的総合評価、説得力、表現力、構成力、独創性の尺度との間に有意な相関がみられた ( $r = 0.319$ 以上であれば5%の有意水準で有意な相関と言える)。

③創作度の尺度は評定者が賛成態度の場合の独創性の尺度、および、評定者が反対態度の場合の主観的総合評価、説得力、独創性の尺度との間に有意な相関がみられた。

④6つの評定尺度間には相互に高い相関がみられた。

## 考 察

本研究では、作文を書く際の諸々の条件が作文の評定値に鋭敏に反映されることが明らかとなった。構え有り条件の方が構え無し条件よりも評定値が高いという結果が得られたのは、後で作文を書くという構えを持つことにより、批判的な立場に立って綿密な社説の論旨の点検がなされ、それが作文の出来栄をよくす

ることにつながったことによると解釈することができるであろう。構え有り条件では反対作文の方が評定値が高く、構え無し条件では賛成作文の方が評定値が高いという交互作用効果がみられたことも、このことを裏付けているように思われる。反対作文の方が賛成作文よりも評定値が高いという結果が得られたのは、おそらく、この社説の場合には反論することの方が賛同することよりも容易であったことによるのであろう。また、社説の論旨に対して賛成の態度を持っている被験者の方が反対の態度を持っている被験者よりも、おそらく、より積極的に作文に取り組んだのではないかと想像される。さらに、被験者が賛成態度の場合には賛成作文の方が評定値が高く、反対態度の場合には反対作文の方が評定値が高いという交互作用がみられたことも、被験者自身の態度と作文の立場とが裏腹であるよりも一致している方がよいことを示しており、当然の結果と言える。

このように、作文を書く際の条件差が作文の評定値に影響を及ぼすという事実は、評定者が作文の書き手の構えや社説に対する態度、さらには書き手が自分の態度（本心）と一致する立場で作文を書いているか否かといった、諸々の心理過程を読み取っていることの反映であろう。また、主観的综合評価の尺度において、評定者の社説に対する態度が作文の評定値に影響を及ぼしていることにも注目すべきである。即ち、評定者が社説に対して賛成の態度を持っている場合には賛成作文を、反対の態度を持っている場合には反対作文を高く評価するというように、評定者の態度の要因×作文の種類の要因の交互作用がみられたのである。さらに、評定者の態度の評定値に及ぼす効果は、総じて、賛成の態度を持っている場合には作文の結束度が重視され、反対の態度を持っている場合には創作度が重視されるという具合に、作文の計量国語学的な尺度と評定尺度との関係にもみとめることができる。

以上の検討により、作文を理解するプロセスは、書き手の思想や心情など諸々の心理過程の読み取りをも含み、また、読み手の側の心理的要因によっても影響を受ける、極めて心理学的なプロセスであることは明らかであろう。そして、書き手側の心理的過程は、その総てが文章中に明示されるとは限らず、むしろ種々の修辞法を媒介として暗示されることの方が多いためではないであろうか。ところが、認知心理学の名の下に

進められている最近の文章理解の研究は、その多くが人工知能の進歩や言語学の理論を背景にしていることもあって、文章の意味構造を言語学の理論に基づいて分析し、それをプログラム言語によって記述することを最終的な目的とすることが多い。つまり、文章を処理することによって理解される意味表象は、命題の集合として記述することが可能であり、文章それ自体の論理的・文法的構造を分析することによって捉えることが可能だと考えるのである。こういった認知科学的アプローチも、おそらく、人間が文章を理解するプロセスの一側面を捉えてはいるであろう。人間が文章の意味を理解するために、文の統語論的規則や意味論的規則などに関する知識に基づき、種々の文法的解析を行っていることは疑い得ない事実であるし、論理的・文法的な意味構造を理解することはあらゆる文章理解の基本でもある。しかしながら、このような認知科学的アプローチでは、人間の文章理解過程の一側面しか捉え得ないことも事実であろう。本研究においてその一端を明らかにすることができたように、人間の文章理解には、共感、反論、評価など、種々の高度な心理的過程が関わっているのである。人間の文章理解過程の全貌を明らかにするためには、これらの心理的過程をも視野に入れ、多面的に研究を展開することが重要であることを、本研究はいみじくも物語っていると云えるのではないであろうか。

## 引用文献

- 朝日新聞社説 1975 女性への期待 朝日新聞縮刷版 昭和50年2月号、通巻664号 朝日新聞社 Pp.215.
- 小谷津孝明 1984 児童詩の理解と添削のプロセス 日本心理学会第48回大会論文集、448.
- 森 敏昭 1987 文章理解に関する研究 — 俳句の理解に及ぼす感想文作成の効果 —, 中国四国心理学会論文集, 20, 34.
- 森 敏昭・中條和光 1988 文章理解 日本児童研究所(編), 児童心理学の進歩, 第24巻, Pp. 49-73.
- 森 敏昭・石田 潤 1987 俳句の鑑賞に及ぼす解説の効果 中国四国心理学会論文集, 19, 29.
- 山梨正明 1987 文脈と言語理解の諸相 日本語学, 6(5), 26-36.